
踵を掴む者

抹茶小豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

踵を掴む者

【Nコード】

N1956L

【作者名】

抹茶小豆

【あらすじ】

「この指輪を持つものが、一切の財産を所有することになる」父の臨終の間際、宏次は父を欺きその指輪を手に入れるが、その代償として、兄高弘に命を狙われることになる。

欺

子供の頃、クリスチャンであつた父は、よく寝物語にその話を聞かせてくれた。

——それは遠い異国の物語——
砂埃舞う、砂漠の物語なのだと。

その昔、神に愛された民があつた。

その民に双子の兄弟が生まれた。

全身毛むくじゃらで生まれてきた兄の名はエソウと名付けられ、

そして——弟は兄の踵を掴んで生まれ落ちた。

それ故に弟の名は『踵を掴む者』という意味を込めて、ヤコブと名づけられた。

やがて二人は成人し、兄エソウは野で狩人となり、弟ヤコブは天幕で働く者となつた。

ある日、空腹で天幕に帰り着き、食べ物求めた兄にヤコブはその代償として、エソウの長子の特権を渡すことを誓わせる。

後にヤコブは一計をめぐらし、長子の特権のみならず、兄が受けるべきすべてのものを奪つてしまう。

そして兄は言う。

「まことに弟はヤコブ、私の『踵を掴む者』である」と。

——無能者が——

宏次は心の中で毒づく。

横ではしたり顔で、先程から兄の高弘が自分と寝た女の自慢話に興じている。

彼は口を開くと金、女、博打の話しか、しない。
宏次は黙って次の会議の資料に目を通す。

——何故自分が、こんな出来損ないに殉じなければならないのか
？――

——ただ生れ落ちた順番が、兄より遅かったという理由だけで――

『長兄による相続は、先祖伝来の知恵なんだよ』と父は言う。
そうと決めてしまえば、無益に争わなくて済むからね。
ひとつの家で争いが起これば、たちまちその家は成り立ちいかなくなる。

あなたは――

兄を支えて立派にこの家を盛り立ててくださいね。

眼裏に浮かぶのは、少し年老いた父の柔和な笑顔。

——理不尽な――

腹立たしさに唇をかみ締める。

不意に話題の矛先がこちらに振られる。

「でもよう、こいつもう23歳のくせに、未だに童貞なんだぜ？」
と高弘が勝ち誇ったような視線をこちらに向けると、一斉に卑猥な
笑い声が起こる。

唯一、そのみが、兄が弟に優位に立つことができること。

「弟御は純情でいらっしゃる」

兄は自分に媚、取り入ろうとする連中を込んで側近に置いた。
ちやほやされるのは気分がいいし、自分好みの助言は耳に優しく

た。

自分がただ、利用されているだけの存在であることも知らずに。

—— 虫酸が走る ——

宏次は無言のまま会議室を後にし、洗面室に向かう。
顔を洗うその水の冷たさが心地良かった。

鏡に映る自分の顔が妙にくたびれて見え、苦笑する。

携帯が鳴る。

母親からの着信であった。

「あなた、今まわりに人は？」

切羽詰った物言いに、宏次は身構える。

母は手短に

父が危篤であり、すぐに病院に駆けつけること

そして—— 誰にも知らせずに一人で来るようにと告げた。

宏次は母の指示に従い、一人でタクシーに乗りこむ。

運転手に行き先を告げた後は、終始無言で窓の外を見つめる。

厚い雲に覆われた空が、今にも泣き出さんばかりである。

父は自分の後継者に、兄高弘をと、やんわりと周囲に告げてはいたが、遺言にしかとそう記したわけではない。

病院に着き、タクシーを降りる。

重い足取りを叱咤しつつ、父の病室に向かう。

父の病室の前で、和服姿の母がぼんやりと佇んでいるのが見えた。

「宏次さん」

母の声が、少し震える。

「お母さん、お父さんの容態は？」

「お医者様のお話では、今夜いっぱいだと・・・」
母は唇を噛みめ、必死に涙をこらえる。

覚悟はしていたものの、宏次の心に言い知れぬ寂しさが満ちる。
優しく有能であつた父。

その手の温もりに、

幾度となく安らぎを得、

その背中を

どれだけ頼りにし、憧れたことだろう。

「お父さん・・・」

一筋の涙が頬を伝う。

「今は——泣いているときではありません。」

母は何かを決意したかのような、鋭い眼差しで宏次を見据える。

——お父様はまだ意識がおりです。今から病室に入り、

あなたは高弘のふりをしなさい。お父様はもう、視力を失っています。——

声だけなら、ごまかせます。

そういつて母は、こっそりと持ち出した高弘の香水を宏次に吹き付けた。

半年前、父は医者から末期癌の宣告をうけた。

父はその死をただ静かに受け止め、一切の延命治療を拒否し、遺言を認めた。

そして限りある命の日々を母と共に穏やかに過ごした。

——お父様はあなたに、ひとつの証をくださるでしょう——

父は一切の機材を身体に取り付けることをせず、ただ静かに眠っていた。

穏やかな微笑をたたえ、それは幸せな旅路であるかのように思えた。瞼を閉じたまま、父は声を振り絞る。

「・・・高弘ですか？」

「はい」

宏次は瘦せた父の手を握る。

涙が溢れるのをこらえきれない。

父がそつと宏次の頬に触れる。

「泣かないでください。」

私はもう充分に幸せなのだからと

父はまるで幼子にそうするように、宏次の頭を撫でる。

「これを、お前に・・・」

枕元に置かれてあった小箱から、何かを取り出す。

それは――家紋を繊細に細工した指輪であった。

父はそれを宏次の指にはめ、満足そうに微笑を浮かべる。

「これで、私はもう思い残すことはない。」

病室の外で母が告げる。

――この指輪を持つものが、全ての権利と財産を相続する――
父の残した遺言には、そう記してあるのだと。

季節はずれの嵐となり、雨がアスファルトに叩きつける。

高弘は服が濡れるのもかまわず病院へと走る。

タクシーに乗っていたのだが、

運悪く事故のために起こった渋滞に巻き込まれてしまい、

遅々として進まない車に業を煮やし、タクシーを降りたのだった。

――父の危篤――

今まで自分を守り育んでくれた、あの大きな手が失われようとして

いる。

それは高弘の心に、言い知れぬ不安と焦燥を掻き立てた。

—— お父さん ——

—— お父さん ——

—— お父さん ——

必死の思いで父の病室に辿り着く。

苦しそうに肩で息をしている父の手を握る。

「お父さん、高弘です。」

その声に反応し、父がビクッと大きく震える。

「高弘だと？ ばかな！

ではさっきの者は一体……」

父の呼吸が乱れ、苦痛に顔が歪められる。

そして告げる。

自分が遺言に記したことを。

—— この指輪を持つものが、全ての権利と財産を相続する ——

父が震える唇をかみ締める

「もう……間に合わん」

高弘の瞳に大粒の涙が溢れ出す。

「お父さん、お父さん……

私にもそれを与えてください。

私の分、私の受ける分を！」

父の呼吸がさらに荒くなる。

「ああ、なんということだ。

お前の弟が私を騙し、指輪を持ち去ってしまった。」

——そして、父は死んだ——

高弘は父の書斎のソファに座り酒を飲んでいた。

もう、随分と強かな量を飲んでいるのか、虚ろな瞳は赤く充血している。

昔から頭の出来も、外見も、全てにおいて弟が勝り、そんな弟を母は溺愛した。

高弘は空のグラスを床に叩きつける。

「胸糞悪い！」

あの弟が、自分から全てのものを奪う。

母の愛情も、そして唯一自分に注がれた父の愛と財産でさえ、父と自分を欺いて奪ってしまうのだ。

許せない。許してなるものか！

高弘の心に黒いものが満ちる。

机の引き出しから刃物を取り出、しかとそれを握り締める。

向かう先は、弟の居室。

布団を頭までかぶり、彼は今微睡みの中にいる。

さぞかし幸せな夢を見ていることだろう。

父と自分を欺き、莫大な財産を手に入れ・・・

しかし、それは夢で終わらせる。

お前なんかに、

お前なんかに渡さない！

刃物が布団の上に勢いよく振り下ろされる。

暗い部屋の中を羽毛が楽しげに舞い、ゆっくりと地面に降り積もる。

逃亡

母が高弘の異変を察し、一足先に裏口から宏次を逃がす。
宏次は深夜のプラットホームへと走った。
それは惨めな旅立ちだった。

乗り込んだ電車の中で、宏次はしばしの微睡みを得る。
夢の中で、父が歌っていた。

『主よ、いよいよ近づかん
輪が踏むべき 十字架の
道をさけて 行くべきかは
主よいよいよ 近づかん』

クリスチャンであつた父は、子供の頃よく兄と自分を教会に連れて
いってくれた。
そしてよくこの歌を歌っていた。

——罪の呵責？——
今更、と自嘲する。

この歌は確か4番まであるのだが、2番は確かこうだったと思う。

「野を旅して 夕暮れに
我の石をば 枕に
野宿せしが 夢にもなお
主よみもとに 近づかん」

この歌詞の意味は、あの昔話の続きとなる。

——兄エソウの長子の特権と神の祝福を奪い取った弟ヤコブは、

兄に命を狙われ叔父のもとに逃れてゆくのだが、その旅の途中で石を枕に眠っていると神の使いが現れ、必ずヤコブを祝福すると約束する。――

「神ねえ・・・」

理不尽な存在だと思う。

―― あんたが俺を兄より先にこの世に誕生させてくれてりゃ、俺はこんなことせずに済んだんだ。――

朝日がのぼる美しい田園風景を眺めつつ、宏次は思う。

―― 俺はヤコブなんて人とは違う――

「神なんて、信じない」

―― 俺が、神なんだ――

信じられるのは己のみ。

運命というものを切り開くのは、己の才覚でしかない。
奪い取ってでも。

宛てもなく、宏次はある田舎町に降り立った。

田植えにはまだ間があり、しばしの休息を得たその土地に菜の花が咲き競う。

傷心からか、それは心に染み入る光景であつた。

親切そうな老婆がひとり、その道を通りかかり、宏次に声をかける。行く宛てがないことを告げると、快く自分の家に招き入れ、離れにある一室を供してくれた。

老婆が作ってくれたおにぎりを頬張ると、涙が溢れて止まらなかった。

いつまでも好意に甘えていられないと、宏次は仕事を探す。

どんな仕事でも精一杯がんばるつもりだった。

程なく、観光客が多く訪れるという地元の鮮魚市場での仕事が決まり、老婆にそのことを告げると、自分のことのように喜んでくれた。

恋心

宏次には商才があつた。

宏次が勤めるこの鮮魚市場は、とある地元の有力者の所有であつたが、宏次が勤めはじめてからは飛ぶ鳥を落とす勢いで売り上げを伸ばした。

いつしか、誰もが宏次に一目置くようになり、店をまかされるようになった。

そして宏次の店は現在もトップの売り上げ成績を叩き出している。

会議に出席するため、宏次は本社の前に佇む。

すらりとした長身に、センス良くスーツを着こなす。

すれ違う女子社員が頬を赤らめ、宏次に熱っぽい視線を送る。

「素敵ね、真田さん」

黒塗りの高級外車の後部座席から小太りの初老の男が降り、宏次の背中をぽんと叩く。

「やあ、真田君」

相手を値踏みするような、狡猾で無遠慮な視線。

「垂水会長」

宏次は男に一礼する。

「そんなにかしこまらんでいい。

お互いもつと気楽にいかんか？」

宏次と共に会議室へと歩き出す。

他愛ない会話を交わしながら、

宏次にはこの初老の男の瞳に、一瞬剣呑な光が宿つたように見えた。

垂水権三は娘の美恵子に酌をさせながら自室で酒を飲んでいる。

「なんですの？」

今日は特別にご機嫌がよろしいのね。」

美恵子はゆるくウェーブのかかった長い髪をかき上げる。

目元に泣き黒子があるのが印象的な美女である。

その艶やかな唇を酒で濡らし、父を見る。

垂水は「わかるか？」と笑いながら口に酒を運ぶ。

「あの男やりおったわ！」

誰もが苦難の末にまとめることのできなかつた商談を、宏次はたった1週間で成立させた。

宏次は——これまで様々な修羅場をくぐりぬけ、多くの人員を統率してきた垂水ですら舌を巻く逸材であるのだ。

垂水は宏次を手放したくなかつた。

宏次を手放すこと、それはすなわち甚だしい自社の損失を示している。

是が非でもその手中に宏次を収める手っ取り早い方法は、娘、美恵子との婚姻関係を結ばせることであつた。そうすれば自動的に宏次を跡取りとして周知させることができる。

美恵子は、次に父に言われることがわかつていた。

そして、言われる前にその要求をすでに受け入れていた。

それが自分の運命なのだと。

最近本社に行く際に、宏次にはちよつとした楽しみが出来た。

本社総務部の前から2列目で電話の対応をしている彼女——

名前を山本由香子という。

黒髪をアップにまとめた制服姿で飾り気はあまりないけれど、それがかえつて彼女の清楚な美しさを際立たせていた。

出会いのきっかけは、数週間前に本社を訪れた時、雨に降られ難儀をしていた宏次に、彼女が傘を差しかけてくれたことだつた。以来本社を訪れる際には、自然と彼女と他愛ない話をするようになり、それが、宏次にとっての密やかな楽しみとなつたのである。

わざと、総務部の前の自販機で缶コーヒーを購入する。

横に設けられたベンチに腰かけ、総務部の部屋に視線を向ける。窓越しに彼女の姿を見つけると、受話器を握り締めた彼女が姿の見えない電話の主に向かって、何度も頭を下げている。

宏次は口元に笑みがこぼれるのをこらえきれない。

同時に暖かいような、こぞばゆいような感情が心を満たし、それは不思議と心地よいものであった。

宏次は缶コーヒーを口に運びつつ、腕時計を見やる。

「真田さん、めーっけ！」

彼女の笑顔が不意に宏次を覗き込む。

宏次の心臓が早鐘のように脈打つが、その動揺を悟られまいと少し距離を置き、平静を装う。

「もう、駄目ですよ、こんなところで油を売ってちゃ〜」

茶目つ気のある風情で、再度宏次を覗き込む。

宏次は自販機で彼女の分の紅茶を買って渡す。

「はい、お疲れ様」

「わゝ、ありがとう。」

彼女のその咲き初めの花のほころぶような笑顔に、自分は何度励まされ、癒されたかしかない。他愛ない会話を二、三交わすと、休憩時間の終わりを告げるチャイムが館内に響く。

「もう、戻らなくちゃ」と背を向ける彼女が振り返り、

「またね」と満面の笑み。

宏次は思わず天を仰ぐ。

「まじ、ヤバイ」

宏次を苛む微熱と動悸は、一向におさまりそうにないらしい……。

二階のカフェテリアから、美恵子是一部始終を見ていた。

—— お父様のいう真田という男は、彼なのね ——

彼と親しく話すのは、総務部の確か山本由香子といったか・・・。

美恵子は強く唇をかみ締める。

山本由香子は、美恵子の腹違いの妹にあたる。

由香子は父がその愛妾に産ませた子であり、そのことで、母も自分も随分と苦しんだ。

真田という男と由香子は、美恵子の目には、彼等は互いに想い合い、しごく幸せそうに見えた。

美恵子の白く美しい手が、卓上に生けられた一輪の真紅の薔薇を握りつぶす。

掌から花弁が零れ落ち、棘で傷をつけたのか、花弁と同じ色の血がそこに滴っていた。

就業時間の終わりを告げる館内放送が流れ、人々は早々に帰り支度をし、帰路につく。

由香子は玄関で小さくため息をつき、今日に限って傘を持って来なかったことを悔やむ。

背後で宏次が少し大きめの黒い傘を開く。

「入っていけば？」

この間のお返し、と宏次が笑いかける。

由香子は少し顔を赤らめ、下を向く。

「行こう」

宏次が少し強引に彼女の腕を引っ張ると、由香子が少し驚いた様子で宏次を見上げる。

スコールのような激しい雨が地面に叩きつける。

もはや傘など役に立たない。

雨が――彼女の髪を、そして白いブラウスを濡らし、彼女の華奢な身体のラインを露にしていくな。淡いピンクの下着が透けて見え、艶かしい。

雨をやり過ぎたため、彼等は今小さな電話ボックスの中にいた。辺りに人影はない。

彼女の吐息が、やはりびしょ濡れになった宏次の胸元に漏れる。距離が近い。

「なんだか、いつもの真田さんと違って見えて・・・」
びつくりしちゃった。

と由香子は下を向く。

宏次は焦れていた。

彼女が好きで、もうずっとその先の一步を踏み出したかったのだが、それができない自分が齒痒かった。

電話ボックスに激しく雨が叩きつけて、外からは二人の姿は見えない

「こんな俺は嫌い？」

宏次は真つ直ぐに彼女を見つめる。

「・・・そんなことは、ないけど」

由香子は戸惑っている様子で下を向く。

宏次はぎこちなく彼女の身体を抱きしめた。

濡れた衣服を通して伝わる彼女の体温が妙にリアルで。

「あ・・・」

宏次の腕の中で、由香子は蚊の泣くような声でつぶやく。

「好きだ」

耳元で囁かれた低音に、頭の感覚が麻痺していくのを由香子は感じた。

宏次は由香子の顔を上げさせ、口付ける。
彼女の瞳が見開かれ、そして閉じられる。

——雨はまだ、やみそうにない——

誘い

「ねえ、あなたが真田さん？」

美恵子は宏次に微笑みかける。

大輪の薔薇が咲き誇ったような艶やかさである。

「はい、そうですが」

何か？と宏次は相手を訝しむ。

「例のプロジェクトチームに、あなたを推薦したのは私よ」

挑発するような視線が宏次に向けられる。

「皆があなたの噂で持ち切りよ。」

有能なのね。

熱っぽく情熱に潤んだ瞳。

濡れたルージュが紡ぎ出す賞賛の言葉。

「恐れ入ります。」

一礼してその場を去ろうとする宏次を美恵子が引き止める。

「待つて、全体会議の前にそのプロジェクトの草案を是非あなたに見ていただきたいの後で私の部屋に来てくださる？」

「では、後ほど寄せていただきます」

宏次が応じる。

美恵子のいうプロジェクトチームへの参加は、すなわち海外赴任を意味する。

宏次はあまり乗り気ではなかったが、それにかこつけ由香子にプロポーズをした。

由香子は寂しそうに微笑み、宏次に自分の身の上を語った。

由香子が垂水の妾腹の娘であり、美恵子の腹違いの妹にあたること。

母は幼い頃に亡くなり、ずっと父の援助を受けて育ったこと。日陰の身の上の自分と、社内の誰もが一目置く出世株の宏次との結婚を、父が許すことはない。

宏次は是が非でも垂水に自分たちの結婚の承諾を得るつもりだったし、もし垂水がそれを良しとしないならば、この会社を辞めることも厭わなかった。

現在もその実力を買われての、他社からの引き抜きのおファーは数え切れない。

——そうか、彼女と由香子は母親は違うが姉妹なのか——
そういえば、顔は全然似ていないが、声はよく似ている。
愛しい人へと思いを馳せ、思わず宏次の顔に笑みが浮かぶ。

ドアをノックすると、美恵子が宏次を部屋に招き入れる。
それは美恵子専用に使われた客室でサイドにはワインセラーが備え付けられている。

宏次はソファアに腰掛けると、美恵子に酒を勧められた。

「勤務中ですので」と断り、

「例の草案を見せていただけますか？」ときりだす。

美恵子は微笑を湛え、宏次の隣に座る。

濡れたルーージュに媚薬を潜ませ、

紡ぎ出すのは罨か、それとも・・・。

「そんなの、どうでもいいではありませんか」

美恵子の細くしなやかな腕が宏次に絡められ、その胸のあたりに身体の重みを預ける。

「わたくしの気持ち、おわかりでしょう？」

潤んだ瞳が宏次を見つめる。

「さあ、皆目検討もつきません」

宏次はその身体を離し、

そう言つて部屋を後にする。

美恵子は乾いた笑いを抑えることができなかった。

「どうしたんだね？そんな深刻そうな顔をして、君が私に相談なんて」

宏次は真つ直ぐに、小太りの初老の男を見据える。

「山本由香子さんのことです」

そう切り出すと、垂水は僅かに眼を細めた。

「自分是由香子さんと、結婚を前提に真剣にお付き合いをしています」

宏次はこれまでの経緯を垂水に報告し、その承諾を迫った。

「参りましたなあ。お恥ずかしいことを知られてしまったようだ。」
と垂水は苦笑し、

「あなたが、由香子を幸せにしてくれるのなら、私は喜んであなたがたを祝福しましょう」
と笑顔で応じる。

自室で酒を飲みながら、垂水は終始無言のまま。
時折何かを思案するように窓の外の風景に目をやる。

「今日は黙つたままですのね。」

父の晩酌の相手をしていた美恵子は、自分のグラスに琥珀色の液体を注ぎ、口に運ぶ。

「真田のことなのだが」

父が切り出す。

「よろしいじゃありませんか、素敵だわ」

と美恵子が応じ、笑う。

垂水は宏次を手放したくなかった。

関係の希薄な妾腹の娘由香子では、宏次をこの場所に繋ぎ止めることはできない。

「お父様は真田さんのことをよっぽど手放したくないのね。」

美恵子はその美しい脚を組みかえる。

「で、どうしろとおっしゃるの？」

美恵子の目裏に、宏次の横で幸せそうに微笑む由香子の姿が過ぎる。そして父の背中を見つめる幼い日の自分と、むせび泣く母親の姿の幻。

握り締めた掌に爪が食い込み、白く色が変わる。

宏次は垂水に招かれ、地元では名の知れた老舗旅館にいた。

今まで由香子に対して父親らしいことも出来ずにきたが、由香子が自分の愛しい娘であることは変わらず、結婚を前に一度三人でゆつくりとした時間を持ちたいという申し出であった。三人で酒を酌み交わし、由香子の幼少のころの話や今は亡き由香子の母親の話などに花が咲き宏次にとってもそれは興味深い話であった。

「些か酒がまわったようだ」という垂水の言葉を受けて、宏次と由香子は自室に引き上げる。

宏次は先ほど浴場に行くと言った部屋を出た。

由香子は思う。

幼い頃に母を亡くし、自分はずっと愛情に飢えていたのだ。

父は今日私に

——娘として愛しく思っている——と言ってくれた。

由香子はそのことを思い出し、目頭が熱くなった。

言葉を自分は生涯忘れないだろう。

鏡台の前で由香子は念入りに乳液を肌にしみ込ませていく。

長く美しい黒髪をほどき、丁寧に梳かす。

浴衣姿に酒がまわったせい、少し紅潮した肌がなんともいえず艶である。

不意に鏡に人影が横切り、ゆつくりと由香子に近づく。

由香子の悲鳴が喉で凍りつき、意識を失う。

宏次は露天風呂で空を眺めていた。

月も星もない。

その深い闇を宏次は少し気味悪く思った。

部屋へと続く長い廊下にも、ただ足元だけを照らす頼りない明かり。部屋に戻ると、由香子が布団の上に座っていた。

顔の判別がつかないほどに明かりが絞られている。

「由香子？」と声をかけると

由香子が誘う。

「さあ、はやくこちらにいらして」

細くしなやかな腕が、宏次をやおら抱く。

宏次は由香子の胸に顔を埋め、貪るようにその唇を奪う。

——狂乱の夜が更けゆく——

陵辱

由香子が目を覚ますと、そこは先ほど自分がいた部屋とは少し内装が異なっていた。

視界に父の姿を認め、まずは安堵する。

「目が覚めたのか？」

と垂水が差し出す水を受け取り、

「どうして私はお父様のお部屋にいるの？」

と無邪気に問う。

刹那、垂水の手が由香子の帯をほどく。

はらりとほだけたそこから、下着が露になる。

「お父様何を・・・」

またも由香子の喉で悲鳴が凍りつく。

次の瞬間強い衝撃が由香子を襲う。

由香子は垂水に後頭部を殴られ、しばし気を失う。

垂水の指が由香子の胸を弄り、上を向かせ唇を塞ぐ。

ねっとりした不快な感触が鉄の味とともに入り込んできて、思わず声をあげる。

「お父様、やめて！」

行為の後の余韻の中で、宏次の腕に抱かれていた由香子

——いや美恵子が不意に笑い出す。手元の照明を調整し、自分の正体を明かすと

「・・・ばかねえ」

とつぶやいてよこし、身を離す。
宏次は驚きのあまり声が出ない。

美恵子はさつさと身支度を整え、窓際のソファに腰掛ける。
窓を開けると波音が聞こえ、冷たい風が入ってきた。
美恵子は煙草を一本取り出し、煙を燻らせる。

「どうしてこんなこと！」

宏次が怒りのこもった声で美恵子に問うと

「さあ、どうしてかしら？」

とどこ吹く風の風情で応じる。

徐に鍵を取り出し

「あの人に聞いてみなさいよ」とそれを渡す。

宏次は胸騒ぎ覚え、部屋を後にする。

「由香子！」

宏次は走り出す。

部屋に残された美恵子は、しばらくぼんやりと夜の海を眺めていた。
遠くに点々とかかり火が見える。

それはさながら幻想的で、非現実的な光景だった。

美恵子と思う。

生命とは、本来光を好むものののに。

美恵子は自分の身体がこの深闇に溶けてなくなるような感覚を覚え、
思わず自分の肩を抱きしめる。

由香子への復讐心を抱き、それだけの理由で――
自分は愛してもいない男に抱かれた。

なぜだか涙がとめどなく溢れ、

不意に美恵子の乾いた唇が

「助けて」

と呟いた……。

由香子の見開かれた瞳から大粒の涙が溢れる。
彼女の信じたものが崩れ去る。
垂水の眼は赤く血走っている。

「お前は生来 of 娼婦だ」

低く耳元に堕ちていく言葉に、心が凍りつく。

——お前は母親に良く似ている。——

ふと懐かしむような、愛おしむような視線を由香子に向け、
次の瞬間その眼差しが狂気を帯びる

——お前の母親は私を裏切って、男と逃げた——

——私がこんなにも愛しているのに——

——私がこんなにも愛しているのに——

由香子の華奢な首筋に、手がかけられる。

駆けつけた宏次がその光景を目の当たりにし、絶句する。
そして次の瞬間全身に怒りが込み上げ、相手を睨み付ける。

「私を殺したいか？」

垂水が宏次を一瞥する。

宏次の震える手が、ガラス製の灰皿を掴む。
振るえが止まらない。

「お前にはできまいて」

垂水は低く笑う。

「そうまでして、お前はあれを欲するか？」

——ならば、お前は私の奴隷になれ——

宏次は全身が粟立つのを感じ、しばし身じろぎすらできない。

「早く行け、あれを連れて早くここを出ろ！私の気が変わらないうち」

垂水が後にした部屋の中で、宏次はしばし呆然と立ち尽くした。

葛藤

日当たりの良いマンションの一室にベッドは据えられ、由香子は窓の外を見やる。

空の青さが、なんとも身にしみる。

「具合はどう？」と宏次が昼食を持って部屋に入る。

——あれから2ヶ月が経過し、

彼女の傷心も、宏次の献身的な優しさのゆえに、ようやく快方へと向かっている。

あの日以来、二人は一緒に暮らしている。

今のところ彼女の身体と心を思いやり、拳式も入籍もしていないのだが、

もう少し彼女が回復したならば、と宏次は思う。

宏次特製の鍋焼きうどんを口に運び、「美味しい」と由香子が微笑む。

宏次は、由香子がつらい思いをした分、いや、それ以上に由香子を幸せにしたかった。

宏次の由香子への思いは、日を追って増していった。

美恵子は軽く催した吐き気に顔を顰める。

手帳を見つめ、その可能性に思いを馳せ、

——今はまだ細い下腹部に手を置く。

「まさか」

と、その思いを打ち消してみるが、再度吐き気が美恵子を苛む。

意を決し、車を走らせドラッグストアへと向かう。

自分の前に一組のカップルがいた。

少し照れながら、しかし嬉しそうにそれを手にとってレジへと向か

うその光景を見て

美恵子は素直に羨ましいと思った。

くつきりとしたラインが2本顕れ、それが陽性反応を示す。美恵子の唇に歪んだ微笑が湛えられる。

夕方、宏次の携帯に着信が入る。

それは美恵子からの呼び出しであつた。

宏次はぎこちない笑みを由香子に向け、

「すぐ戻るから」と部屋を出た。

待ち合わせの場所は市内のホテルのラウンジで、

すでに到着していた美恵子は、優雅に紅茶を飲んでいる。

「子供ができたの、あなたの子よ」

とそう唐突に切り出すと宏次の頭は真っ白になった。

「もちろん産むわ」

と微笑む美恵子は美しく、そして誰よりも残酷に思えた。

宏次のなかで思い描き、膨らませていた幸せが踏みにじられ、空虚なものが宏次の心に満ちる。

「だけど——俺はあなたを愛してなど、いない」

真っ直ぐに美恵子を見据えると、一瞬美恵子の顔が苦痛に歪み、

「関係ないわ、愛なんて」

と吐き捨てるようにそう言った。

「私はあなたと結婚できれば、それでいいのよ」

美恵子は愛を知らなかった。

愛することも、愛されることも知らなかったから、自分がそれを切望していることも知らなかった。

あるいは、知っていたから——それを遠ざけたのか。

——ならば、お前は私の奴隷となれ——

あの日、垂水が低く囁いた一言が、宏次の耳に鮮やかに蘇った。

——いつまでも宏次さんの好意にばかり、甘えてちゃ駄目だ。――

あの出来事は確かにつらく悲しくはあったけど、ちゃんと前を向いて生きなければ。

最近ようやくそう思えるようになった。

由香子は窓を開けて部屋の空気を入れ替える。

「気持ちいい」

そういつて由香子はひとつ大きく伸びをする。

洗濯物を干し終わるとインターホンが鳴った。

訪れたのは思いがけない人物で、由香子の瞳は大きく見開かれる。

「お姉さん」

「久しぶり」

と美恵子が微笑む。

ソファーに腰掛けると、まだほとんど目立っていない腹を大儀そうに擦る。

由香子は紅茶を美恵子の前に置き

「お姉さん、ひょっとして赤ちゃんができたの？」

と嬉しそうに問う。

「ええ、順番が逆になってしまったのだけれど、

式にはあなたにも是非来ていただきたくて」

美恵子は招待状を取り出し、由香子に手渡す。

由香子はそれを受け取り絶句する。

――新郎 真田宏次――

礼拝堂に厳かな賛美歌が流れる。

花嫁は美しく、勝ち誇ったかのような満面の笑み。

十字架を前にして宏次は自分の罪を思う。

——かつて自分は父と兄を騙し、この地に逃れてきた。
そして、今自分の隣にいる花嫁とその父に騙され、
愛してもいない相手と結婚する——

それは神が与えた自分の罪に対する報いのような気がした。
そして今日自分は、この敵かなる場所でもう一つ罪を重ねる。

「汝病めるときも、健やかなるときも生涯その妻を愛することを誓いますか？」

宏次の唇が乾く。

「・・・はい、誓います」

——それは偽りの罪——

鐘が鳴り響き、人々の祝福を一身に受ける新郎新婦が、姿を現した。
由香子は誰にも気づかれぬように、遠巻きにそれを見つめる。
ため息の出るような豪華なドレスに身を包み、
満面の笑みを浮かべる美恵子を、由香子は美しいと思った。

羨望、憧憬、そして嫉妬。

そんな感情を持余している自分を、由香子は「卑しい」と思った。
自分が宏次ではなく、他の男の人を好きになっていたらなら、二人の
結婚を素直に喜べたであろうに。

しばらく屋上で空を眺め、由香子は少しだけ泣いた。

式を終えた宏次と美恵子がホテルの自室へと引き上げる。

宏次は一刻も早く由香子のもとに急ぎたかった。

——どういう気持ちで、由香子は今日という日を過ごしたのか——

宏次は胸が締め付けられるような気がした。

宏次はシャワーを浴び、手早く服を着替える。

美恵子はソファ―に座り、大儀そうに腹を擦る。

美恵子は宏次を騙したことを悔いていた。

自分と一緒にいるとき、

彼は決して笑わない。

彼は怒っているのだ。

だけど彼は、時折私に優しさをくれる。

彼の眼差し、

掌の温もり

美恵子は宏次に惹かれていた。

——今日は、宏次とたくさん話をしよう。——

たくさん話をして、少しでも彼の怒りが和らぐように、
努力をしよう。

自分たちは夫婦なのだから。

「今日は君もお疲れだったね。ゆっくり休むといいよ」
そう言つて宏次は部屋を後にする。

「あつ、どこへ？」

美恵子は下を向く。

こうして——もう何度宏次の背中を見送ったことだろう。
そして気づく。

——自分は寂しいのだ——

幼い頃、愛人の家に赴く父の背中を見送ったときと同じ。
美恵子の頬をとめどなく涙が伝う。

今日は宏次は帰らない。だって今日は――。

由香子は夕食にカレーを作った。

宏次は帰らないとわかっていながら、だけど、もし帰ってきたときにすぐに食べられるように。

カレーならすぐに温められるし、保存もきく。

インターホンが鳴る。

息せき切って走ってきた風情で宏次が佇む。

焦ったように由香子を抱きしめ

「ごめん」

と切ない声で詫びる。

宏次は抱えてきた大きな包みを由香子に渡す。

包みを開くと、それは純白のウェディングドレスだった。

「いつか、二人きりで式をあげよう」

と約束すると、由香子は宏次に口付ける。

脛に

鼻先に

そして唇に

キスキス――それはキスの雨。

そして二人は愛し合う。

由香子が口を開く。

「宏次さんは、もう行かなくちゃ。」

「もう少し・・・だけ」

宏次は由香子を抱きしめるが、由香子はそっとそれをとどめる。

宏次はのろりと身体を起こしシャワーを浴びる。

「すぐに戻るよ」と軽いキスを交わし、宏次が部屋を後にする。

その背中を見送る由香子は、やっぱり涙が溢れてしまう。

「嬉しいのか、悲しいのか、もう・・・わからないよ」

お腹の子は臨月を迎えた。

美恵子は大きく膨らんだ自分の腹が気味悪かった。

——一体自分はどうなるのだろうか——

相変わらず夫は留守がちで、自分に心を開くことはなかったが、さりとて喧嘩になることもなかった。

だけど、空しい。

と美恵子は思う。

ぼんやりと窓の外をみやると、

不意に下腹部に痛みを感じ蹲る。

「あつ、ああ！——」

痛みの波が押し寄せる。

「奥様、陣痛です。しつかり気をお持ちになってください！」

家政婦に伴われ病院に着いたが、

美恵子は先ほどから、一人でその痛みに耐えていた。

「あつ、うつうつ」

ベッドの柵を握った手が白む。

美恵子を病院に伴った家政婦は、入院の手続きや、方々への連絡のために席を外している。

「痛い！痛い！痛い！誰か助けて！」

痛みと恐怖のあまり涙が出る。

だんだんと増してくる痛みが一層不安を掻き立てた。

「——っあああ！——」

言葉にならない呻きが漏れる。

苦痛のなかで、美恵子は宏次の姿を思い描いた。

どうして、あの人は来ないの？

あの人がいて、この手を握っていてくれたらいいのに。

それだけで、自分はこの痛みに耐えられるような気がした。

またも強い痛みの波が押し寄せる。

「うっうっうっ！――！」

自分ひとりでは、気持ちいが萎えてしまう。

玉の汗とともに涙が流れ落ちる。

分娩室の椅子の上でライトを浴び

医師たちが見守る中

美恵子は恥ずかしい格好をさせられる

苦痛の中で意識が薄れる。

――これは私の罰なのだ――

私が彼を騙し、彼女からその幸せを奪ったから。

美恵子の瞼に由香子の面影が過ぎる。

黒髪が風になびき、幸せそうに笑っていた。

だけど――

美恵子は彼女に「ごめんね」ということができなかった。

「おめでとうございます！」

元気な男の子ですよ。」

朦朧とする意識の中で美恵子はそれを聞いた。

差し出された赤子を、愛しいとは思えず、

それは美恵子にとって、夫を自分に繋ぎ止めるだけの道具でしかなかった。

――これで、夫は自分を愛するようになるだろう――

美恵子はしばしの微睡みに落ちた。

生命

五年の歳月が過ぎ、宏次は美恵子との間にもう一人子を儲けた。そして三人目が今、美恵子の腹の中にいる。

しかし一向に由香子が身ごもる気配はなく、そのことを宏次は、由香子以上に残念に思っていた。

しかし先日ついにその兆しが顕れた。

「赤ちゃんができたの」

と少し照れながら告げる由香子を、

宏次はそつと抱きしめる。

誰よりも自分はそのことを望んでいた。

それは自分と由香子との絆であり、その唯一の証であった。

小さな生命の宿る由香子の腹にそつと触れると、

まだ見ぬ我が子への愛情が、幸福感とともに宏次のうちに満ち溢れてゆく。

時は満ち、美恵子は男の子を産んだ。

由香子もまた男の子を産んだ。

赤ん坊の枕元に置かれたオルゴールを幾度となく聞きながら、美恵子は物思いに耽る。

長男である康祐が産まれてから、夫は随分と自分を労わり、気遣ってくれていたように思う。ひょっとするとそれは愛情というものはなかったのかもしれないが、夫が傍にいてくれるだけで、自分は随分満たされていたように思う。

——しかしまた、夫は帰って来なくなった——
仕事だ、と宏次はいうのだが、漠然とした不安が美恵子の心に満ちる。

「お母さん？」

今はもう五歳になった康祐が心配そうに母親の顔を覗き込む。

「大丈夫よ。お母さんは少し頭が痛いのに」

向こうで遊んでね。と笑顔を取り繕うと、

「うん、わかった。」

としょんぼりと肩を落とし、康祐は部屋を出る。

最近、お母さんはいつもあんな顔をしている。

お父さんがあんまりお家に帰ってこないから、きつとお母さんは寂しいのだと思う。

幼心にも康祐は母親を守りたいと切に思った。

不意に名案が浮かんだように、康祐は思った。

お父さんに電話をしよう。

お母さんが寂しがっているから、早く帰ってきてと、

お母さんの気持ちを伝えてあげるの。

そしたらきつとお父さんは帰ってきてくれて、

お母さんは笑ってくれると思うの。

康祐は宝箱に入れていたメモを取り出す。

それは、留守がちな父が、以前自分に渡してくれたもの。

「康祐が寂しくなったら、この番号に電話しておいで。」

お父さんとお話をしよう」

そういつてメモを渡してくれた優しい父の笑顔を思い出す。

メモを取り出し、電話台へ向かう。

受話器をもって一生懸命に背伸びをし、

プッシュフォンを押すと、数回の呼び出し音の後に宏次の声がする。

「もしもし？」

いつもの父の声じゃないような気がして、康祐は少し恐かったが、

勇気を振り絞って声をだす。

「あのね・・・僕、康祐」

少しの沈黙の後で宏次が応える。

「康祐、お父さんは今仕事で忙しいんだ」

不意に受話器の向こうから、赤ん坊の泣き声がする。

「お母さんがね・・・」

と康祐が言いかけたとき――

通話は宏次によって一方的に切断された。

康祐はしょんぼりと肩を落とす。

今夜もまた、父のいない食卓。

美恵子と康祐、そして次男の寛人の三人で夕食をとる。

康祐が浮かない顔をしているのを美恵子が気遣う。

「どうしたの？そんな顔をして」

「だって、お父さんが一緒になくちゃ寂しいもの」

と康祐が下を向く。

美恵子は胸の痛みを堪えつつ、取り繕う。

「だめでしょ？そんなことを言っては。お父さんはみんなのためにがんばって

お仕事をなさっているんだから」

美恵子は康祐を言い含めようとするが、康祐はどうにも腑に落ちない様子で、

「じゃあ、僕もお父さんの会社に行きたいな」

と口を尖らせる。

「大人になったらね。子供の康祐が会社に行ったら、お父さんの仕事の邪魔になるでしょう？」

「えー！でもお父さんの会社には赤ちゃんがいるんだよ」

邪魔といわれてプライドが傷ついたのか、ぷうと顔を膨らませる。

「どういうこと？」

美恵子は柳眉を顰める

「あのね、僕今日お父さんにお電話したんだ。
そしたらお父さんは仕事で忙しいっていったんだけど・・・」

——その後ろで、赤ちゃんの泣き声がしたんだ——

不意に背後で、三男の晃が泣き出す。

「ほら晃ちゃんと、同じ赤ちゃんの泣き声だよ」

美恵子を作ったグラタンを口に運びつつ、康祐は無邪気に応える。

今日は天気がよい。

洗濯を終えた由香子はようやく一息つくことができた。

赤ん坊の志郎は先ほどから、父親に抱かれ上機嫌の様子。

「毎日育児ばかりじゃ、大変じゃない？」

宏次が由香子を気遣う。

「今日は俺が志郎をみてるから、たまには羽を伸ばしてきたら？」

由香子は少し考え、遠慮なく宏次の好意に甘えることにした。

赤ん坊がいると何かと物入りで、紙おむつやミルクのストックが欲しかったし、

日用品の細々としたものも買い足しておきたかった。

「夕方までには戻ります。」

そう言い置いて、由香子は部屋を出る。

宏次が愛息の志郎を抱いて自分を見送ってくれている。

それは何気ない日常なのだが、なぜか由香子はその光景をしっかりと瞼に焼き付けておきたかった。
そんな思いを自嘲する。

——ただ買い物に行くだけなのに——

おかしいわね、そうひとりごちる。

車を走らせ、行き着けのスーパーで予定の買い物を手早く済ませると、

なぜだか無性に海が見たいと思った。

宏次には申し訳ないが、少し回り道をして帰ろうと、由香子は思った。

曲がりくねったこの山道を抜けると、もうすぐだ。

人生もこの山道と似ているのかもしれない。

そんなことを考えながら道を進むと、海が見えた。

日の光に照らされ、輝く水面を遠くにみる。

きて良かったと由香子は思った。

刹那、一発の銃声が人気のない山道に響く。

それは寸分の狂いもなく由香子のこめかみを打ち抜き、

死の瞬間、由香子は今朝自分を見送りに出てくれた、宏次と志郎の幻をみたような気がした。

由香子が戻らない。

「夕方には戻る」

そう言っただけで家を後にしたのだが、もうとうに六時をまわっている。

志郎はミルクを飲み終え、ご機嫌なのだが、宏次の心はなんとなく落ち着かない。

先ほどから何度か、由香子の携帯に電話をかけているのだが、つながる気配もない。

闇が帳をおろし、雨が降り始めた。

電話が鳴る。

その着信音に一瞬心臓を鷲掴みにされたような感覚を覚え、苦笑する。

「もしもし——」

雨が激しく窓を叩く。

稲妻が遠くで閃き、

志郎はただ目を丸くして、それを見つめていた。

すでに由香子の亡骸は納体袋に納められている。

—— ひどく傷んでいますので。 ——
とのことだった。

解剖の結果、そのこめかみには銃痕が、彼女の車から銃弾が見つかったとのことだった。

宏次は半ば惚けていた。

今朝は生きて、自分に温かい笑顔を向けてくれたその人が——今は冷たい骸と成り果てる。

宏次はその事実を受け入れることも、泣くことすらできなかった。

宏次は自宅へと向かう。

それは久方ぶりの帰宅であり、子供たちが嬉々として宏次を出迎え、少し遅れて美恵子が出迎える。

美恵子は鞆を受け取り、宏次を気遣う様子。

「あなたお顔の色が優れませんわ。 どうかなさって？」

「ああ、少し疲れている。」

と二階の自室で横になると、美恵子がそっと宏次の背に抱きついてくる。

宏次は身を離し、美恵子を見据える。

「由香子が死んだよ」

美恵子は笑い出す。

乾いたその笑いを、美恵子は抑えることができなかった。

そして笑いながら、自分が泣いていることを美恵子は知らなかった。

「そう、あのこは死んだの」

美恵子の笑いは止まらなかった。

「そう、そうよ。わたくしだわ。わたくしが殺したのよ。人を雇ったの。」

許せなかったのよ。わたくしのあなたを奪う存在が」

そして不意にむせび泣く。

「馬鹿な子、こんなにも早く逝ってしまうなんて。」

可愛いそうな子」

—— だけど、あのこが悪いのだわ。あの子の母親とあの子が、母とわたくしから、父を奪ったのだもの。そしてわたくしと子供たちから、あなたを奪った——

ふわふわと定まらない視線をこちらに向ける。

「そう？でも君は俺を騙し、由香子から俺を奪った。そしてその命までも」

命二八・・・命ヲモツテ・・・。

宏次が美恵子の細い首に手をかける。

美恵子の瞳が見開かれる。

康祐は「おやすみなさい」を言い忘れたのを思い出した。

両親の寝室のドアの前に立つと、

何かを言い合っているような声が聞こえた。

そつとドアの隙間から中を伺うと、父が母の首に手をかけている。

「あ、あああ、やめてよ！！！」

康祐がその間に割ってはいる。

父の目は充血し、赤く濁っている。

その様を康祐は赤鬼のようだと思った。

康祐は恐怖のあまり震えが止まらない。

宏次が手を離すと美恵子は苦しそくに咳き込んだ。

その後

——母の存命中、父は一度もこの家に帰ってくることはなかった

秘事

宏次が家に帰らぬようになって随分経つ。

康祐は高校生になっていた。

友人と駅で別れた後、帰路につく足取りが重い。

玄関には見知らぬ男の靴。

—— またか ——

康祐は小さくため息をつき、自室へと向かう。

美恵子の部屋からはせわしない喘ぎ声。

それは艶で、卑しく、そして侵しがたいくらいに高貴であった。

母は今、女として

見知らぬ男に組み敷かれている。

どういう表情をし、

誘い

果てるのか

母は美しい

その母が卑しめられる場面を思い描き

康祐は震え、果てる

後に残るのは後悔と嫌悪感。

「だめだ。こんなの」

康祐は暗い部屋で膝を抱える。

—— 母は死ぬつもりなど、なかったのかもしれない ——
ただ眠れないからと、その量を誤って飲んでしまったのだ。
その朝美恵子は目を覚まさなかった。

傍らで三人の息子がむせび泣く。

それは蒼白で、どこまでも冷たかった。

しかし康祐はそれを美しいと思った。

この世の何よりも侵しがたく、神聖な美しさだと思った。

蠟人形のように成り果ててしまった、母の亡骸に口付ける。

御伽噺のように、母は目覚めることはなかったが、王子が自分ではなく父ならば、と康祐は思う。

いや、そうではない。

そうではないのだ。

母を死に追いやったのは他でもない、父なのだ。

康祐の心に黒いものが満ちる。

母の葬儀は社葬となり、垂水の娘としてふさわしく盛大に執り行われた。

多くの人が参列し、口々にその葬儀の立派さを褒めた。

おかしい光景だと康祐は思う。

これだけたくさんの方がいるのに、誰一人母の孤独や葛藤を知っていた者はおらず、

その死を本当に悼む人がいないように見えた。

父ですら、母の死に涙ひとつみせない。

そのことが、腹立たしいのか悲しいのか、康祐にはよくわからなかった。

一度父と静かに話しをしようと思った。

父と母の間にあった葛藤を、自分はもう理解できる年齢に達している。

「あの、お父さん話が――。」

と切り出してみるものの、

「お母さんの葬儀で、私も疲れている。後日にしてもらえないか」と言われてしまう。

一度は「そう」と応じたものの、やはり父には話を聞く義務がある

と思い直し、

父を追ってタクシーに乗り込んだ。

着いた先は、高級そうなマンションの玄関。

康祐は気づかれぬように父を尾行する。

父は5階の表札のない部屋の前で立ち止まり、鍵を開けた。中から現れたのは、自分とあまり歳の違わないであろう、美しい女性だった。

——あれが、父の女——

憤りと好奇心とが混ざり合う。

後日、康祐はその部屋の前に立っていた。

「父のことで話が——」

と切り出すと、彼女はすんなりと部屋に康祐を迎え入れた。小ざつぱりとはしているが、玄関に花が生けられており、部屋に置かれている何気ない装飾には趣向が凝らしてある。将来インテリアデザイナーになりたいのだと、彼女は言う。

「あなたのお父さん？ ああ、お金だけの関係だから、悪く思わないで」

大学の授業料と、このマンションを提供してもらってるのよ。と彼女はあっけらかんとした様子で応じる。

「じゃあ、君は僕にその口止め料を払ってよ。」

彼女は、康祐を値踏みように見つめ、「いいわ」と応じる。

——これは父の女——

そのことが、康祐の心を不用意に掻き立てた。

「これで、私とあなたは共犯よ」

彼女の呟きが冷やりと康祐の耳に落ちる。

康祐と美咲の関係続く。

しかし『取引』という関係はもはや存続できないほどに、二人は惹かれていった。

しかしお互いにそれは言い出せない。

なぜならこれはゲームだから。

言ってしまうと負けなのだ。

しかし相手には言わせてしまいたい。

「ねえ、あなたは私が好きなんでしょう？」

よく手入れのされた美咲の爪には蝶をモチーフにした装飾が施されている。

康祐は思う。

彼女は蝶なのか——それとも。

タランチュラ

自分が彼女の糸に捕らえられた獲物であるような錯覚に陥る。

彼女の唇は毒を孕んで……

そう——白く細い腕が康祐をやおら抱くと

理性も意識も臍げに白んでゆく。

——彼女の幻惑に魅せられ、堕ちて、沈む——

予定が狂ったのだ。それは先方の突然のキャンセルで、

午後がまるまる空いてしまった。

時間を持余し、宏次は何とはなしに彼女の家に向かう

「この時間帯なら、もしかしたら出かけているかもしれない」

宏次は靴からスニーカーを取り出し、ドアを開ける。

見知らぬ男の靴を不審に思う。

中の様子をそつと伺うと

寝室から声が聞こえる。

「あなたは私が好きなんだわ」
宏次は鍵穴から、それを伺う。
美咲がベッドの上で男と戯れている。
宏次の全身が怒りで熱くなる。
不意に男が振り返り、
宏次は戦慄を覚える。

由香子の忘れ形見である志郎は8歳になっていた。
志郎は宏次の姿をみつけると、嬉しそうに走り寄った。
宏次は志郎を抱きしめる。

由香子に良く似た瞳が満面の笑みにほころぶ。
志郎は先日参加したピアノのコンクールで最優秀賞を受賞したことを
興奮しながら宏次に話して聞かせた。
客間には宏次から贈られたグランドピアノがどっしりとした風貌で
主を迎える。

「お父さんにも聴かせておくれ」
奏でる旋律は ショパン スケルツォの1番
愛妾と息子の裏切り
宏次は苦笑する。

自分には彼らを責める資格などないのだ。

志郎が愛しかった。

志郎だけが愛しい存在であるかのように思えた。
自分が生涯で愛した、ただ一人の女性由香子。
そして志郎は、由香子がこの世に残した、たったひとつの証。
自分もかつて、今は亡き父がしたように遺言をしたためようと思う。

——この指輪を持つものに、自分の持つ全ての財産と権利を譲る

演奏を終えた志郎を膝の上に座らせ、宏次は徐に指輪を取り出す。それは若き日に父と兄を騙し奪った指輪。それを志郎にしっかりと握らせる。

「お父さん、これなあに？」

「これはお父さんの大切なものなんだ。」

お父さんの大切なものを志郎に持つていて欲しいんだよ」

父の遺産と垂水の会社で自身が築き上げてきたものの全て——その莫大な遺産を志郎が継承する様を思い描いた。

「お前が正当な後継者なのだ」と宏次がひとりごちる。

親友

晃は先ほどからピアノを弾いている。

「上手く弾けないや」と呟くと、兄の康祐が声をかける。

「どうした？」

「うん、どうしても友達のと志郎君みたいにうまく弾けないの」

最近晃の通うピアノ教室にとってもピアノの上手な男の子が入ってきたらしいのだが、将来プロになりたいと志をもつ晃と、彼はすぐに意気投合し友達になったのだという。

志郎君と会えるから、最近はレッスンが楽しくて仕方がないのだと晃は話す。

康祐は晃のレッスンに付き添い、ぜひ一度その腕前を見てみたいと思った。

今は亡き母美恵子もピアノが上手だったし、自分も幼い頃からバイオリンを嗜んでいる。

家政婦の運転する車に乗り込み、晃は終始はしゃいでいた。

「志郎君！」

玄関に佇む少年に声をかけると、瞳の美しい少年がこちらを振り向く。

「お父さんを待ってるの」

と窓の外に目をやると、

黒塗りの高級車から一人の男が降りる。

康祐は顔色をかえ、晃を連れてその場を去る。

——志郎は父が愛人に産ませた子——

康祐の頭に母の死様が蘇る。

—— あいつと、あいつの母親のせいで！——

康祐の中に怒りが込み上げる。

晃はいつもは優しく接してくれる兄の顔が憤怒の色に染まるのを恐ろしく思った。

ピアノのマスタークラスはオーナーの知り合いペンションを借り切って行われる。

それは山の頂にあつて、景色は最高なのだが些か不便な地にあつた。家政婦が運転する車の中で、晃は終始無言だった。

兄の言つたことを思い出す。

—— 志郎君はお父さんと他の女の人との間に生まれたこどもなんだつて——

そして、そのせいでお母さんは随分苦しんで、そして死んじゃった。

「お母さんはあいつらのせいで死んだんだ」

本当にそんなんだろうか。

母の死が瞼を過ぎる。

「あいつらのせいで」

アイツラ ノ セイデ？

「晃君！」

現地着き、オリエンテーションを終えると、志郎が晃に声をかける。

「僕たち、一緒に部屋だね。」

志郎が満面の笑み。

その笑みは陰りを知らない。

晃は顔を曇らせる。

「あのね、僕、部屋の鍵を無くしてしまったんだ。

一緒に探してくれない？」

「うん、いいよ。」

二人で山道を歩き、先ほどオリエンテーションが行われた場所に戻る。

少し先には崖があるのだが、

「たぶんあっちの方だと思う」

晃は崖のほうを指差す。

え、どこ？

志郎は下を向く。

崖の下に海が見え、白い波が翻る。

——アイツ ノ セイデ オ母サン ハ 死ンダ——

晃の手が志郎を突き飛ばす。

「あ、あああ！」

晃が震える。

震えながら走る。

——ちがう！志郎君は足を滑らせたんだ——

墓標

宏次は冬の海に佇む。

それは由香子が死に、志郎が死んだ場所。

日の出の前で、あたりは薄暗い。

灌木が頼りなく水面を漂い、やがて波に打ち上げられる。

宏次はそれを拾い、砂浜に三つの墓標を作った。

一つは由香子の為に

一つは美恵子の為に

そして志郎の為に

波が宏次の作った小さな墓標を飲み込み、流していくと

宏次は耐え切れずに嗚咽を上げ、泣き崩れた。

罪とは恐ろしい。

その孕む毒が次々と宏次の大切なものを奪っていった。

若かった頃、運命とは自分で切り開くものだ、と信じてやまなかった。

しかし、今は思う。

運命とはなんと抗い難いものか。

宏次はいま、「許し」というものが欲しかった。身を裂くほどにそれを欲した。

この世に絶対的な存在があるのだとしたら、その存在に「お前を許す」と言って欲しかった。

なぜなら、自分の犯した罪の重さはあまりにも重く、もはや正気を保てないほどにその心を締め付け、苛む。

東の空が明るみ始め、太陽が顔を出す。

宏次はその光景を不思議だともった。

宏次には水面に映る太陽の反射の加減からか、それが水平線上に走る大きな十字架のように思われた。十字架が赤い。

血の様に赤く、そして輝いている。

宏次はその場に泣き崩れた。

——許して、どうか、私を許してください。——

幼い頃に見た、教会の壁画にあったイエスが瞼に浮かび自分に笑いかけているようだと思っただ。宏次は思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1956/>

踵を掴む者

2010年10月13日17時54分発行